

第80回 七五読み古事記勉強会 神武天皇 3

目的に至る道を問い直す



毎日のマンガとブログは、 **お稽古**です。

答えを教えるためではなく、
一日ひとつの問いを手にして、
みんなで考えてみる。

学び、問う。
そして、少しずつ
上へ。

日曜
自立

自分で選りながら
人と結ばれて
生きること

月曜
姿勢

どんな自分で
在りたいか

火曜
出口設計

どこへ向かい
どう生きるか

水曜
結び

人とつながり
ともに生きる

木曜
善悪

何を大切に
選ぶか

金曜
Relation

すべては
つながっている

土曜
問い

考え続け
探求しよう

一周して、
また少し上の
自分へ

倭塾 = 大和學問塾

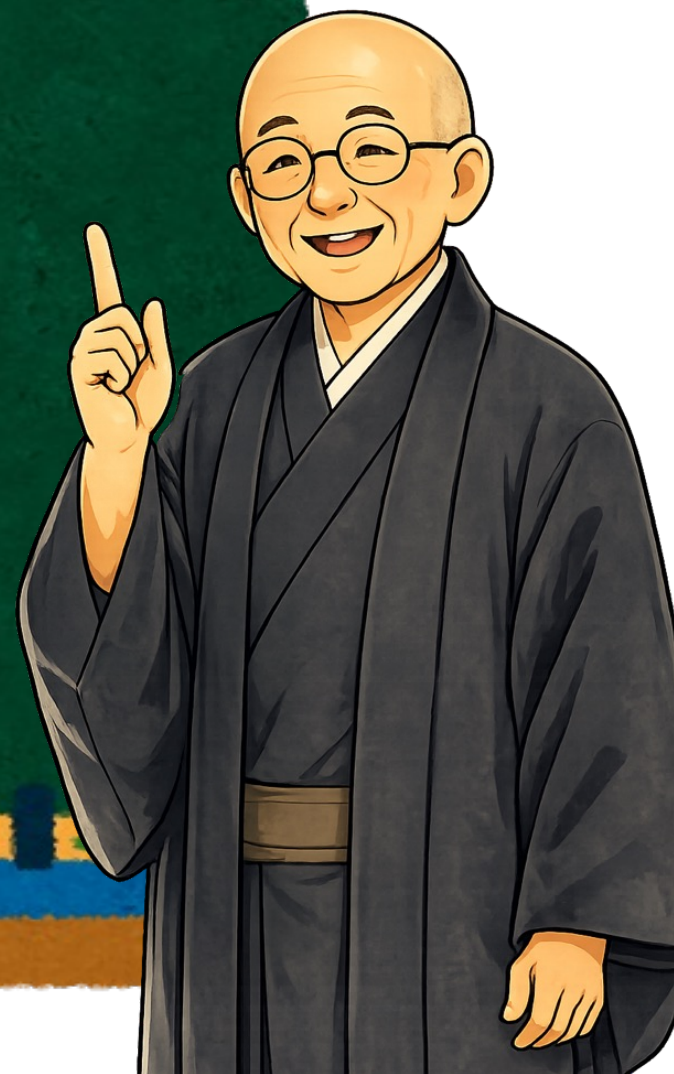
～問いを持った仲間たちと、共に学ぶ場～

私自身も
そのお稽古に参加する
生徒第一号です。

一つ一つのお稽古が
やがて、よりよい未来を
つくっていきます。

今回の学びのポイント

目的へ
至る道を
問い直す。



前回のあらまし

神倭伊波礼毘古命は東征の途上、

安芸国の多祁理宮に七年、

吉備の高嶋宮に八年滞在されました。

さらに東へ進み、速吸門で亀の甲に乗って釣りを
する国つ神と出会います。海路をよく知るといっ

その者に仕える意思を尋ね、御船へ迎え入れ、

槁根津日子（さおねつひこ）の名を与えました。

彼はこの先の東征を導く重要な存在となってい
きます。



原文

故從其國上行之時 經浪速之渡而泊青雲之
白肩津 此時、登美能那賀須泥 毘古

（自登下九字以音） 興軍 待向以戰

爾取所入御船之 楯而下立 故號其地謂楯津
於今者云日下之蓼津也

於是與登美毘古戰之時 五瀨命於御手
負登美毘古之痛矢串 故爾詔

「吾者爲日神之 御子向日而 戰不良
故負賤奴之痛手 自今者行廻而 背負日以擊」
期而自南方廻幸 之時、到血沼海
洗其御手之血故謂血沼海也

從其地廻幸 到紀國男之水門 而詔
「負賤奴之手乎死」

男建而崩 故號其水門謂男水門也
陵卽在紀國之竈山也

今回のお話（現代語訳）

さて、その国からさらに上って進まれたとき、

浪速の渡りを経て、青雲の白肩津に船を泊められました。

このとき**登美能那賀須泥毘古**（とみのながすねひこ）が
軍勢を起こし、待ち受けて戦いを挑んできました。

そこで神倭伊波礼毘古命たちは、御船に備えてあつた
楯を取り、それを手にして船から降り立たれました。

このことから、その地を**楯津**（たてつ）と呼ぶようになり
ました。現在では、**日下**（くさか）の**蓼津**（たでつ）と
呼ばれています。

さて**登美毘古**と戦つたとき、

兄の**五瀬命**（いつせのみこと）は、

その御手に登美毘古の放つた痛矢串（いたやぐし）を受け、
深い傷を負われました。

神倭伊波礼毘古命は仰せになりました。

「われらは日の神の御子である。

それなのに、日に向かつて戦つたのは良くなかった。
だから、このような痛手を受けることになった。

これからは回り道をして、太陽を背にして戦おう」

そう決めて、南の方から回って進まれました。

そして**血沼海**（ちめのうみ）に到着したときに、

五瀬命は御手についた血を海水で洗われました。

このため、この海を**血沼海**と呼ぶようになったのです。

そこからさらに回って進み、紀伊国の**男之水門**（おのみなど）に到着されました。

そこで五瀬命は、

「卑しい奴の手によって傷を負い、このまま死ぬのか」

と、雄々しく叫ばれ、そのまま薨去されました。

そのため、この水門を**男水門**（おのみなど）と呼ぶようになりました。

五瀬命の御陵は、紀伊国の**竈山**（かまやま）にあります。

五瀬命 竈山墓



速吸の戸

吉備 高嶋宮

安芸 多祁理宮

豊国 宇佐宮

日向 高千穂宮

築紫 岡田宮

神武東征の道 (今回の場面)

—— 浪速から戦い、南へ回る ——

今回の主な地名

- ① 浪速の渡し
- ② 青雲の白肩津 (楯津/日下の蓼津)
- ③ 血沼海 (茅津)
- ④ 男水門
- ⑤ 竈山 (五瀬命の陵)

- > 東へ進んだルート
(今回の戦いの場面)
- > 南へ回ったルート
(血沼海・男水門へ)

広域図 (今回の範囲)



0 10 20 30 km

淡路島

紀伊水道

大阪湾

紀伊

河内

大阪

淀川

枚方
(河内の北へ)

大和

日下町

生駒山
(膽駒山)

龍田大社

① 浪速の渡し

② 青雲の白肩津
(楯津/日下の蓼津)

③ 血沼海
(茅津)

④ 男水門

⑤ 竈山
(五瀬命の陵)

今回のあらすじ

浪速の渡しを経て、青雲の白肩津にて登美能那賀須泥毘古の軍と戦う。この戦いで五瀬命が矢を受けたことから、神倭伊波礼毘古命は「日に向かって戦うのは良くない」と決意し、南から回る。血沼海で御手の血を洗い、男水門に至り、ここで五瀬命は崩御。その陵は紀伊国の竈山にある。

日を背にして、さらに東へ

—— 敗れから学び、道を変える ——

七五読み

そのくにのぼり　いくときに
なみはやわたり　あおくもの
しらかたのつに　ふねをとむ
このときとみの　なかすねの
ひこがいくさを　おこしては
まちうけいくさ　いどみたり
しかしてふねに　いれてある
たてをてにして　ふねおりる
そのちなのりて　たてつなり
いまはくさかの　たてつなり

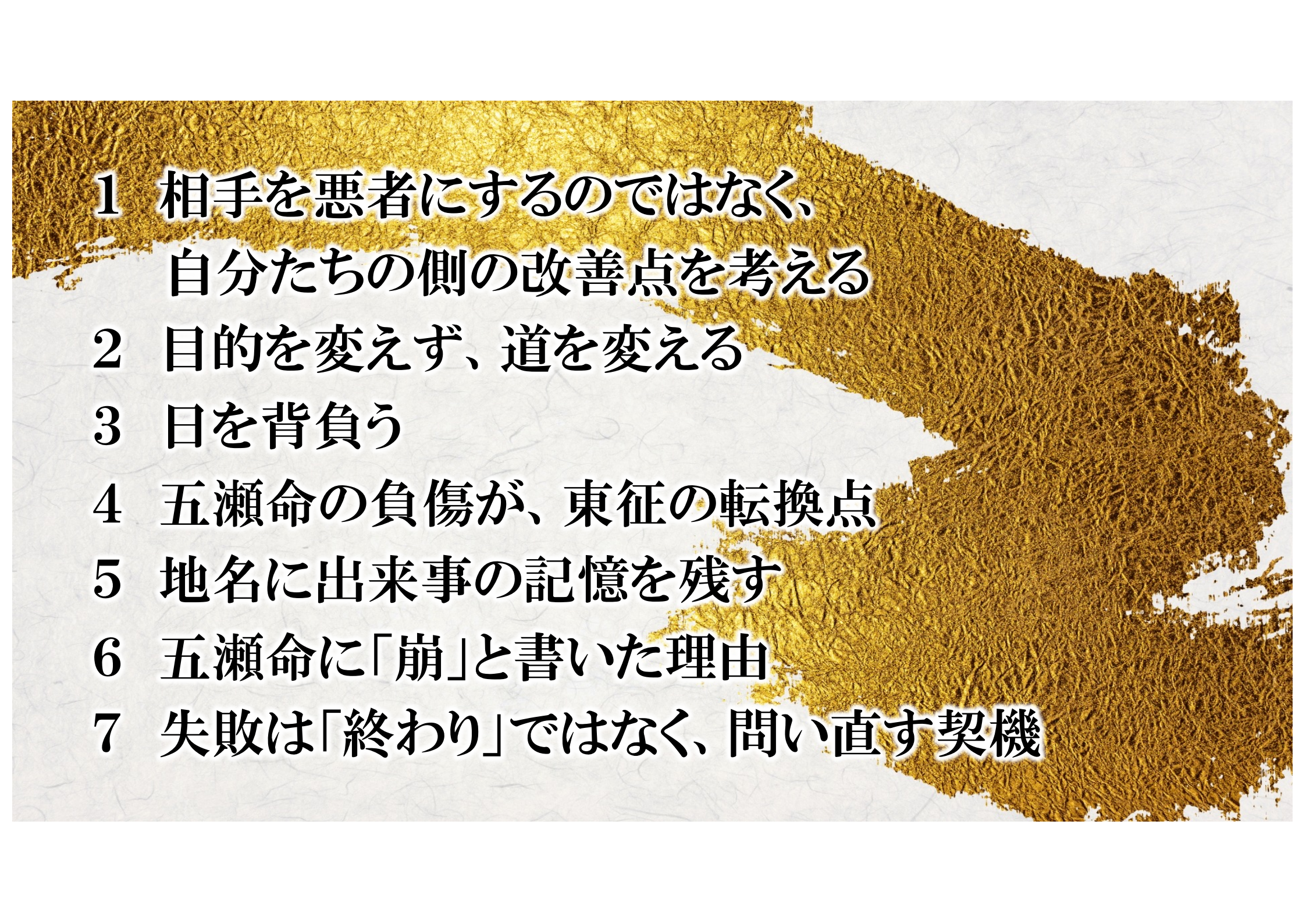
故從其國上行之時
經浪速之渡而泊青雲之
白肩津
此時登美能那賀須泥
毘古（自登下九字以音）興軍
待向以戰
爾取所入御船之
楯而下立
故號其地謂楯津
於今者云日下之蓼津也

とみひこいくさ　おこすとき
いつせのみこと　とみひこの
いたやくしにて　きずをおう
ゆえにいはくは　「あはかみの
みこにしあるに　ひにむかう
しかしていくさ　よからずに
いやしきやつの　いたでおふ
いまよりまわり　みちをして
ひをせにおひて　たたかはむ」
ちぎりてみなみ　まわりゆく
ときにいたるは　ちぬまうみ
みてのちあらう　ゆゑなづく

於是與登美毘古戰之時
五瀨命於御手
負登美毘古之痛矢串
故爾詔「吾者爲日神之
御子向日而
戰不良故
負賤奴之痛手
自今者行廻而
背負日以擊」
期而自南方廻幸
之時到血沼海
洗其御手之血故謂血沼海也

そのちをまわり　すすむとき
きのくにのおの　みなとつく
しかしていはく
「いやしきやつの　てでしぬか」
おたけびあげて　かくれらる
このちなづくは　おのみなと
みささぎきくに　かまやまにあり

從其地廻幸
到紀國男之水門
而詔
「負賤奴之手乎死」
男建而崩
故號其水門謂男水門也
陵即在紀國之竈山也

- 
- 1 相手を悪者にするのではなく、
自分たちの側の改善点を考える
 - 2 目的を変えず、道を変える
 - 3 日を背負う
 - 4 五瀬命の負傷が、東征の転換点
 - 5 地名に出来事の記憶を残す
 - 6 五瀬命に「崩」と書いた理由
 - 7 失敗は「終わり」ではなく、問い直す契機

1 相手を悪者にするのではなく、自分たちの側の改善点を考える

浪速から大和へ入ろうとした
神倭伊波礼毘古命たちは、
登美能那賀須泥毘古の軍勢に阻まれ、
兄・五瀬命が矢傷を負いました。

『古事記』は、初代天皇となる人物を
「最初から何でもうまくいく英雄」として
描いていません。

ここで重要なことは、
負けたことそのものより、その後のこと。

神倭伊波礼毘古命は
「吾者為日神之御子、向日而戦不良」と、
まず自分たちの戦い方を振り返られました。

相手だけを悪者にして終わらせず、
自分たちの側に改善すべき点はなかったか
を考えられています。



2 目的を変えず、道を変える

大和へ向かうという目的そのものは捨てません。
しかし、正面から東へ進む方法をやめ、
南へ大きく迂回することを選びます。

「**出口を変える**」のではなく、
「**出口へ至る道を変える**」。

これは今回の最大のポイントの一つ。

浪速

正面から東へ
(うまくいかなかった道)

大和

南へ迂回
(選んだ道)

目的は大和へ
—道を変えて、進もう—



3 日を背負う

「背負日以撃」は、
戦術的には**太陽を背にして**
戦うこと。

ここでは、
「**日の神の御子**」として
自分たちは何者なのかを
確認し直した場面と読むことができる。

「出口へ至る道を変える」に際して、
あらためて、
自分たちの立ち位置・姿勢を
問い直している。

背に日を負って、進む

—— 自分たちは、何のために戦うのか ——

日を背にして
戦う

大和へ

南へ迂回

自分たちは、
何のために——



4 五瀬命の負傷が、東征の転換点

一人の痛みを
単なる犠牲として終わらせない。
その出来事によって
全体の進路を見直す。

五瀬命の負傷と死は、
その後の
熊野方面から大和へ入る展開へと
つながります。

ここは大きな分岐点です。

浪速

正面からの道
(困難)

熊野方面からの道
(新たな進路)

大和へ
門

一つの出来事が
新たな来への道をひらく
—— 転換点 ——



5 地名に出来事の記憶を残す

楯を持って上陸したから「楯津」、
血を洗ったから「血沼海」、
五瀬命が雄々しく叫んで亡くなったから
「男水門」。

『古事記』は、
土地と物語を結びつけて記憶するという
特徴が、この短い一節にも連続して
現れている。

土地が、物語を語りつづける
—— だから地名が残る ——

楯津

楯を持って上陸

血沼海

血を洗った海

男水門

雄々しく叫んで亡くなる

浪速

楯津

血沼海

男水門

熊野を経て
大和へ



7 失敗は「終わり」ではなく、問い直す契機

この場面を現代に引き寄せるなら、
うまくいかない → 誰かのせいにする ではなく、
うまくいかない → なぜだろう? → 観測点を動かす → 道を変える
という流れが見えてくる。

うまくいかない

思い通りに進まず、
五瀬命が負傷する。

なぜだろう?

なぜこのような結果に
なったのか?

観測点を動かす

見方を変え、
全体を見直す。

道を変える

次の一手を考え、
進む道を変える。

失敗は終わりではない。問い直すことで、道は開ける。

本日のまとめ

うまくいかなければ、
目的を変えずに、**道**を変える。

うまくいかない



同じ目的を見つめながら、
新しい道を選ぶことで、
道は開ける。

大和へ



道を変える

変えるのは「**道**」
変えないのは「**目的**」

うまく行かぬと

誰かを責める

それじゃ出口が

遠くなる・・・かも♪

